

霧島市城館踏査の状況

～清水城跡と上井城跡～

黒川忠広

1 はじめに

霧島市には、数多くの中世城館が残されている。

筆者は、清水城跡と上井城跡について草木が枯れる冬場を利用して踏査をしてきた。初夏となった現在、作業は、次のシーズンを待たなくては行けない。ここでは、現時点における踏査状況を報告し、今後の足がかりとしたい。

2 清水城跡の踏査

(1) はじめに

清水城跡の縄張り調査は、下鶴氏によって紹介されており、氏の報告に加筆する形で進めている（下鶴2002）。現在のところ、踏査状況から、清水城跡は高所の曲輪群と、鑰掛下の曲輪群の2群に分かれていると想定している。そして、鑰掛下部の曲輪群は八つ手状に延びる台地ごとに小曲輪群を形成し、その間には二又状に分岐を繰り返す自然の谷地形によって分断される構造を有する。

今回の報告では、鑰掛下の曲輪群を紹介していく。

(1) 入口A

現在の登城口につながる。登城口より城内は下鶴弘氏の報告が詳しい。筆者の踏査は、この入口Aにたどり着くまでの周辺部である。現在は北公園入口から市道が整備されているが、旧地形は南北にシラスの崖面、西から東に向かって沢づたいに登る。しばらく進むと突然急峻になり、八つ手状に延びる自然谷を選択しながら登ることになる。選択を間違えると、シラスの崖面直下にたどり着くが、登城は出来ない。市道の建設によって最終ポイントの様相がいまいちはっきりしないが、市道北側に残る沢から回り込むかたちで登城口に近づけたのではないだろうか。

(2) 入口B

アスリート横から東へ進む。南北両側はシラスの崖面に挟まれる。林道左手には湧水がある。しばらく進むと両側にあったシラス崖面が正面にも現れる。左右に細い筋状の道が見える。右側に進むと、すぐに左へ折れ曲がり、先ほどの変化点から奥は見通せない。また、登り道となるが、道幅は狭く大人一人がやっとの幅である。階段状の構造と壁面立ち上がりに柱を差し込んだ痕跡が連続する。道を登り、しばらく進むと唐突に道は終わる。その手前から折り返して上場へ登る。上場は、広い平坦面があり左右には土塁状の構造が看

取でき、囲まれた空間であることが強く認識出来る。右手の土塁は、急峻で、頂部からすぐに断崖へと至る。西（入口）側が低く、連続して3段階で高くなるが、鑰掛手前の切通によって分断される。切通の先は細い道が右手に断崖を有して左手に屈曲し、その先にいくつかの小さな平坦面を有しつつも完結して先へは進めない。左手の土塁を目指す。右手土塁より緩やかで、土塁の頂部は人が一人通行できる幅を有する。細長く、右手と同じように高低差を有しながら連続するが、ここも鑰掛手前で、切通で分断される。右側土塁との違いは上段の土塁から二又状に北側へ延びる土塁の存在である。これを北側に下りながら進むと、観音坂と呼ばれるルートの空堀を見下ろす位置に出る。この観音坂を東へ登りながら進むと、土橋に到達する。

(3) 入口C

地頭仮屋跡から進む。地頭仮屋跡東奥の水田と土捨場との間には堀切があり、土捨場の先にも堀切があり、両者によって台地が分断される。再び地頭仮屋跡から砂防ダム奥を目指す。砂防ダム右手は守公神社跡である。左手は、曲輪群があるが、ここについては今回は省略する。守公神社跡への登り口は左右に分け、右は急峻に神社跡へ登る。左側は、登ると右に直角に右折し虎口状を呈する。これを登ると、左右ともに曲輪となる。いずれも長方形で高所を削り平坦面を有するが、崖際を土塁状に残す特徴がある。西端部は細くなり見張り台の役割を有しているものと思われる。さて、一度清水谷へと戻る。東へ進むにつれシラスの崖面との距離は縮まる。右手に入口状の堀切が現れる。これを登ると左に折れ急勾配でさらに屈曲して上へと続き、やや狭い平坦面にたどり着く。さらに上へと続き、南側は土塁が東西に延び、その南側は崖となる。土塁横に犬走りが続く、東にやや広い曲輪が形成されているが、これで完結しているようである。なお、この西端は、谷部に細い道が続いており、先ほどの守公神社跡の曲輪へと続く。

ちなみに、清水谷をさらに先を進むと、V字状の自然地形が二又状に開口し、少し進むと行き止まりとなる箇所もあり、進軍を感ずる。やがては鑰掛に接して、上段曲輪へはいずれの場所からも進入は出来ない。

3 上井城跡

(1) はじめに

上井城跡は、霧島市国分上井に位置する中世山城である。島津氏の老中として活躍した上井覚兼が誕生した城である。この上井覚兼は、『上井覚兼日記』を記した武将（天文14：1545年～天正17：1589年）で、当時の武士の生活や風習、城に関する当時の様子を知る上で一級の史料である（註1）。近年新名一仁氏によって現代語訳が刊行（新名2020, 2021）されると、改めてその価値や重要性が認識されてきている。

(2) 上井城跡の研究史

国分郷土誌が研究の基礎となる。『前国分郷土誌』で上井城跡は、「城としての規模はさして大きくない」と述べ、「城の様子をうかがうに足る遺構はほとんどない」とした（国分市1973）。しかしながら、中世城館調査によって、本田潔氏による踏査が行われると、曲輪群が確認され、城としての様相が捉えられた（本田1984）。最終的な報告書では、これより簡略化された縄張り図が掲載された（鹿児島県教委1986）。国分郷土誌もこの調査を元にして編集されていると思われる（国分市1998）、郷土誌編纂においても略測がなされている。現時点で、この3者が筆者が知り得た上井城跡の図面である。

上記以外で、研究されたものを確認出来なかった。大規模な戦闘や主戦場として登場することがほとんど確認出来ない状況であったためだろうか。「山腹には上井城の石垣が残っていたが整理され、南公園が新設されている」と郷土誌に取り上げられているが、南九州において石垣を普請するようになるのは義久・義弘・家久期であり、少なくとも上井氏存城期とは考えにくい。この点に関しては、南公園建設時の資料等でその痕跡を把握する必要がある。この公園一帯は、上井城跡よりは低い、検校川流域の低地部より高台となっており、何かしらの構造があってもおかしくはない。

新聞記事としては、高木三志氏の紹介（高木1993）や、最近では上柿元大輔氏による『かごしま城巡り』による紹介（上柿元2023）などがあり、身近な城としての認知に一役買っている。

(3) 踏査の概要

上井城跡は、上野原テクノパークの展望台や城山公園から見下ろすことが出来、城が国分平野に接した丘陵の先端に位置することを容易にうかがい知ることが出来る。最頂部は標高130mである。山裾南部には南公園グラウンドが整備され、ここから階段を使用して登城する。現在の遊歩道を葛折り状に登ると岩の露頭

があり、左右に道が分かれる。中世城館調査では、AからFまでの地区に細分され、D区を本丸相当としている。耕作や公園整備によって当時の姿は改変されている可能性が高いが、現状を縄張り図として記録し、調査研究の足がかりとしたい。なお、本田氏の報告では今回紹介する西側部分のみが取りあげられているが、東側部分に関しても土塁状の痕跡などが確認出来ることから城の一部である可能性も高く、一連のものとして紹介していきたい。以下便宜上、現在の登城口から登った左右の分かれ道を1つの起点として、左手を西側曲輪群、右手を東側曲輪群と称しておきたい。両曲輪群共に、丘陵の細く連なる山頂部を利用した構造である。

(4) 西側曲輪群

曲輪1は、上井城跡の中で最も高いが、その山頂は6m×5mと狭く、現在は三角点がある。南側中腹に祠がある。北側には貯水槽があり、裾部や斜面部は部分的に削平を受けている可能性がある。三角点から西側・北側と螺旋状に低くなり曲輪2と合流する。現状から、物見台的な役割が想定出来るよう。

曲輪2は、祠のある山頂部（曲輪1）と比高差が約5mある。この裾から東西約30m南北20mの長方形状の曲輪で、本田氏が指摘するところの本丸に相当する（本田1984）。

曲輪3は、曲輪2と比高差が約4mある。東西約34m、南北約20mで、縁辺部には土塁等の構造は確認出来ない。

曲輪4は、曲輪3との比高差が約3m。東西約20m、南北約17mと、曲輪2や3と比べてやや小規模の曲輪である。東側には幅約2.8mの堀切1で尾根が分断される。堀切に接する面も含めて土塁等の構造は確認出来ない。南北には旧園路のある帯曲輪が合流する。北側を帯曲輪1、南側を帯曲輪2とする。ただし、帯曲輪1・2は、後世のものの可能性も否定出来ない。

曲輪5は、曲輪4と堀切1で分断される。東西約20m幅16mで東側に虎口状の出入り口がある。虎口は幅2mで南に開口して90度屈曲する。その先は急峻に降り、堀切2で分断される。

曲輪6は、曲輪1の西側直下に位置し、目視であるが曲輪1との比高差は約10mある。本田氏はここを馬乗馬場と称している（本田1984）。この城跡の曲輪の中ではここだけが南北に細長い。

曲輪7は、東西に細長く、旧園路が斜面を登るように曲輪6へ続き、屈曲して曲輪2へ延びる。

曲輪8は、小区画に細分出来ると思われるが、竹林が深くて十分に観察出来なかった。北端が一番低く、久満崎神社へ続く入口とその前庭部となる。この入口

付近では、岩盤が露出して障壁を成し、曲輪1直下で開口して旧園路が残る。久満崎神社方面から登城する場合、右に直角に折れ曲がる。虎口状とも見て取れる。その南側は、わずかな段が確認され、耳状ないしは逆3字状となる。南西部は中でもやや張り出す地形となる。

帯曲輪1は曲輪1から3の北側に位置し、旧園路がある。この旧園路を東側に緩やかに登ると曲輪4へとつながる。

帯曲輪2は、曲輪7よりやや高く、落ち葉ではっきりとしないが高低差が作出されていると思われる。曲輪2・3の南側に延びて旧園路が連なり、曲輪4へ緩やかに登りながら合流する。

曲輪9は、現在の遊歩道の分かれ道で、岩盤が露出しそびえ立つ。図面上では約10m四方の曲輪と見えるが、これは岩盤そのものである。その岩盤の南側に幅4m弱の平坦面があり、これが通路の役割を担う。曲輪とすべきか悩むところだが、岩盤に城の防御機能を期待したものとして曲輪で捉えておきたい。

(5) 東側曲輪群

分岐より東側に位置する。分岐部分は窄まり、小さな馬の背状を呈して北側へ林道が降りながら延びている。この窄まった山頂部を東へ約10m程進むと、曲輪10となる。

曲輪10は、東西約17m程で北側に土塁1が確認出来る。この土塁1は、緩やかなL字状を呈する。

曲輪11は、北側には土塁2がややL字状に残る。東側で曲輪12と緩やかに連続する。

曲輪12は、10m四方の狭い平坦面で、東側には幅3m、長さ15mの土橋状の構造が続く。これは、上部に土囊などが集積しており、近年積み上げられたものである。その下部にある大ぶりの積石が往事のものかははっきりとしない。尾根筋を断ち切った堀切なのか、土橋状の構造で曲輪13や14へと一連の構造をなすか、今後検証が必要である。

曲輪13は、幅の広い尾根筋道である。北側には旧園路が残し、旧山道を生かしたものと思われる。途中危険な場所があり先の確認は出来なかった。南側に土塁3がある。このことから、不定形ながらも曲輪であると思われる。土塁3の南側には小規模な平坦面が段々に連なっており、耕作の影響が色濃く残る。これらの一部に、城の構造が残されている可能性も否定出来ない。

曲輪14は城の東端部である。東西約30m南北約20mの平坦面があるが、東端に旧地形の高まりが残る。この構造がいつ頃のものであるかは不明である。この南側に、一段下がって東西約16m、南北約8mの帯曲輪

3がある。

帯曲輪3は、中程で狭くなり断崖に直結する。これを挟んで2つに細分出来なくもない。桜川流域から敷根城周辺をうかがうには、曲輪14や帯曲輪3の東端が最も適していると言えよう。

このように、東側曲輪群は、土塁状の構造が残されているなど、城としての防御機能を有しているものの、1つ1つの平坦面は狭く、地表面は不安定に波打ち凸凹としている。山の南側斜面は、小さな面が段々に連なっており、耕作の影響を受けている。

一方、西側曲輪群は、堀切こそあるものの、各曲輪には土塁等の痕跡が認められない。後世の削平を受けている可能性もあるが、本来の特徴であるのか発掘調査を実施するなどして構造を明らかにしていく必要がある。また、現在の南公園からその裾野にかけての一带は、いわゆる館があったと目される。古地図では上井城跡は古城と記され、集落は城の南から東南部にかけての山裾にある。今回は、山頂部に残るいわゆる詰城としての上井城跡を扱ったが、平時の館や集落、生産基盤となる田畑などの景観についても視野に入れて研究を進めていくことが肝要である。

4 おわりに

以上、清水城跡と上井城跡について縄張り図を作成し、いささか紀行文的になったが城跡の現状について紹介してきた。結果、これまで臆気ながら紹介されてきていた両城の状況を、部分的にはあるが明らかに出来たのではないかと思う。

多くの中世山城跡は、天守や高石垣を備えた織豊系城郭とは趣を異にした『土の城』である。一部でブームを得て来城者が絶えない城跡がある一方で、周知されないまま進入さえも困難な状態となっている城跡も多数ある。全てを整備することは困難であるが、往時を偲ぶ手段をどのように構築していくか今後の課題である。

中世城館調査は、昭和50年代に実施された鹿児島県全域を対象とした調査で、今日の南九州における城郭研究の基礎となっている。その調査カードを元に、『鹿児島県の中世城館跡』が刊行された。そして、調査カードそのものは鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管され閲覧等が可能ではあるが、一般には余り知られていない。今回、縄張り図を作成するにあたって、この調査カードが大いに参考となった。三木氏は、中世城館跡調査の取り組みに関して「カードは活用が期待」され、「今後は等高線、字界、縮尺、方位を入れ、周囲を含める図面が必須である」と指摘する(三木2012)。

国分平野周辺には、他にも中世城館が残されており、

機会を捉えてこれらに関しても踏査報告を進めていきたい。今回の記録が、南九州の中世城館研究の一助となれば幸いである。

【註】

- 1 日記に記されている城は、上井覚兼が地頭として在城した宮崎城に関するものが多い。千田嘉博氏(千田2004)や新名一仁氏(新名2018)によって詳細に述べられている。
- 2 国分郷土誌には3種類ある。平成10(1998)年発行の国分郷土誌凡例が、昭和48年刊行の国分郷土誌を『前国分郷土誌』とし、昭和35年刊行の国分郷土誌を『旧国分郷土誌』としており、小稿もそれに従う。

【引用・参考文献】

- 上柿元大輔(2023)「上井城跡」『かごしま城巡り』
8 南日本新聞社
鹿児島県教育委員会(1987)『鹿児島県の中世城館跡』
鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(43)

国分市(1973)『国分郷土誌』

国分市(1997)『国分郷土誌 上巻』

下鶴弘(2002)「国分清水城跡見学記」『南九州中世城郭談話会会報』第19号

本田潔(1984)「上井城」『中世城館カード』

千田嘉博(2004)「戦国期の城下町構造と基層信仰
上井覚兼の宮崎城下町を事例に」『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集 国立歴史民俗博物館

高木三志(1993)「上井城跡」『さつまの山城』52

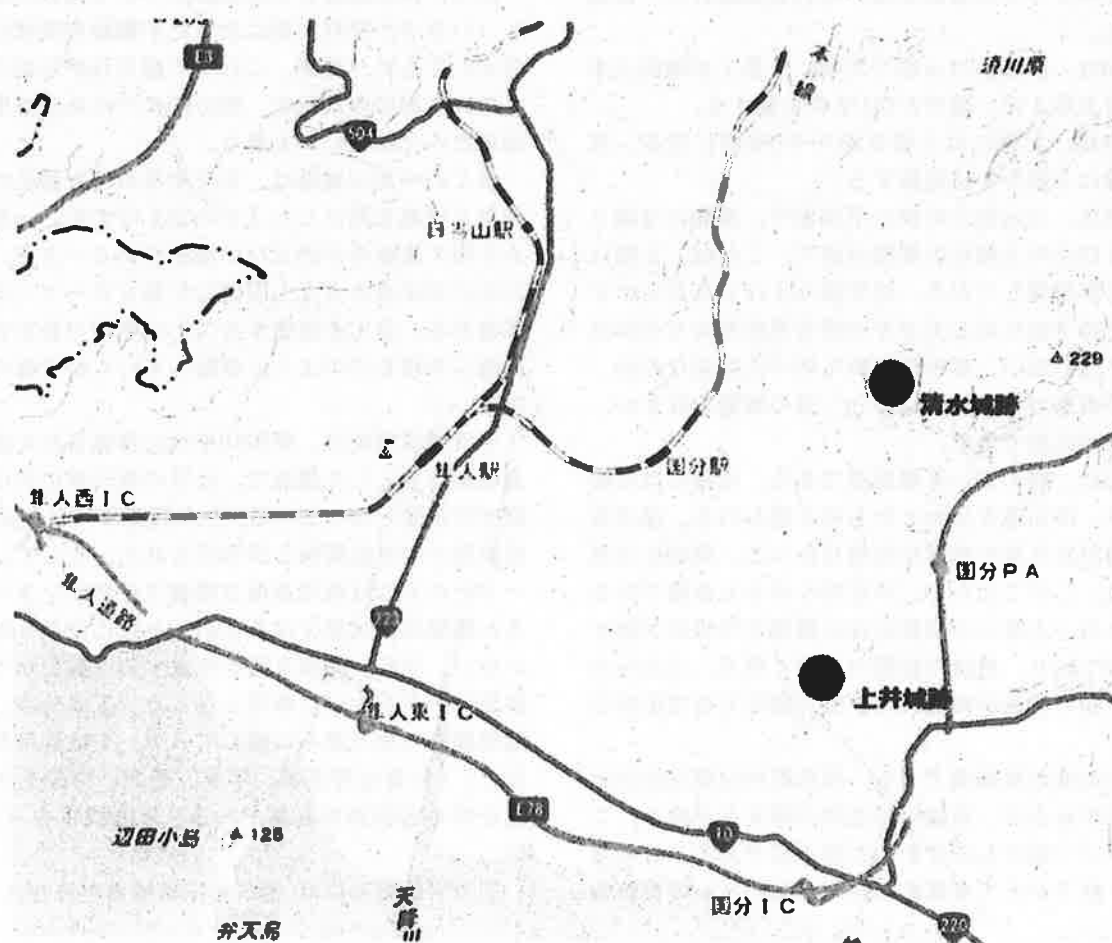
鹿児島新報1993(平成5)年8月9日月曜日(14)

新名一仁(2017)『島津貴久 戦国大名島津氏の誕生』
戎光祥出版株式会社

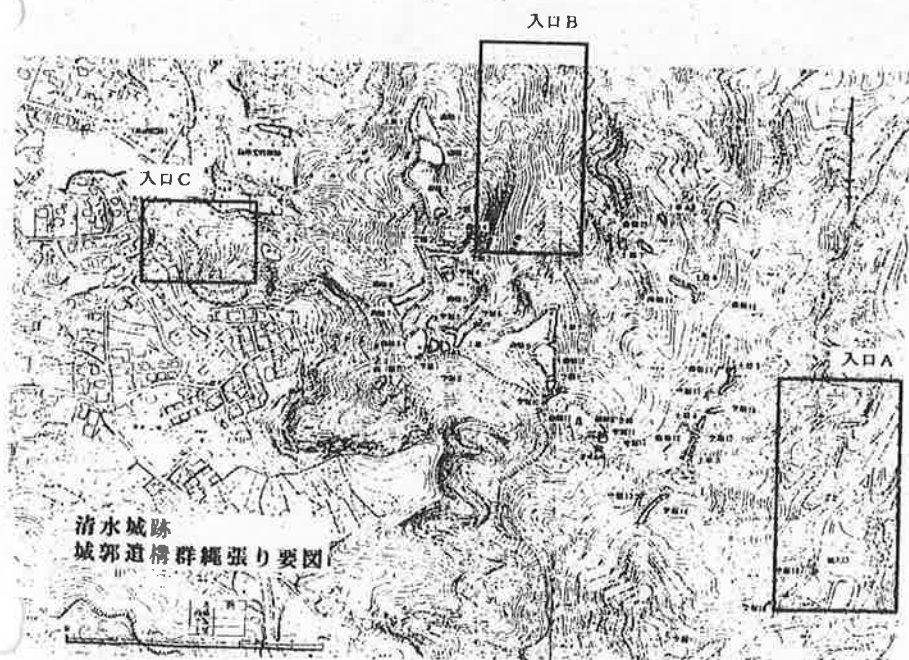
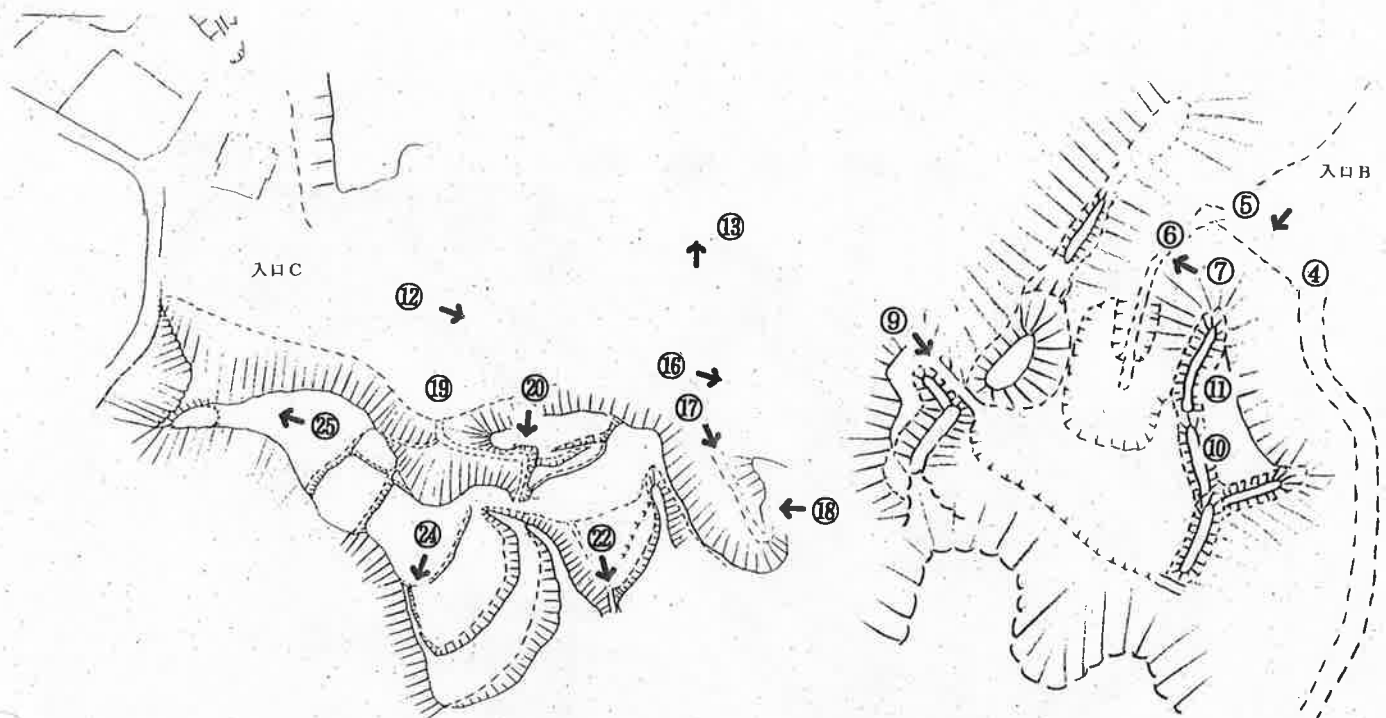
新名一仁(2018)『上井覚兼日記』にみる土木事業
—城郭普請を中心に—『戦国大名の土木事業』戎光祥
中世史論集第6巻 戎光祥出版株式会社

三木靖編(1979)「上井城」「清水城」『日本城郭体系』
第18巻 株式会社新人物往来社

三木靖(2012)「鹿児島における城郭研究の歩み(3)
～南九州城郭談話会の歩みと展望のために～」『南
九州の城郭』第32号 南九州城郭談話会



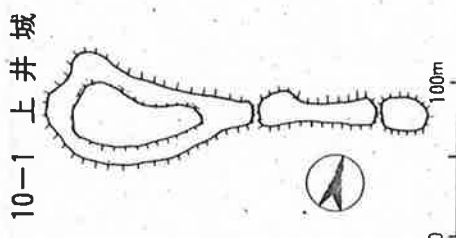
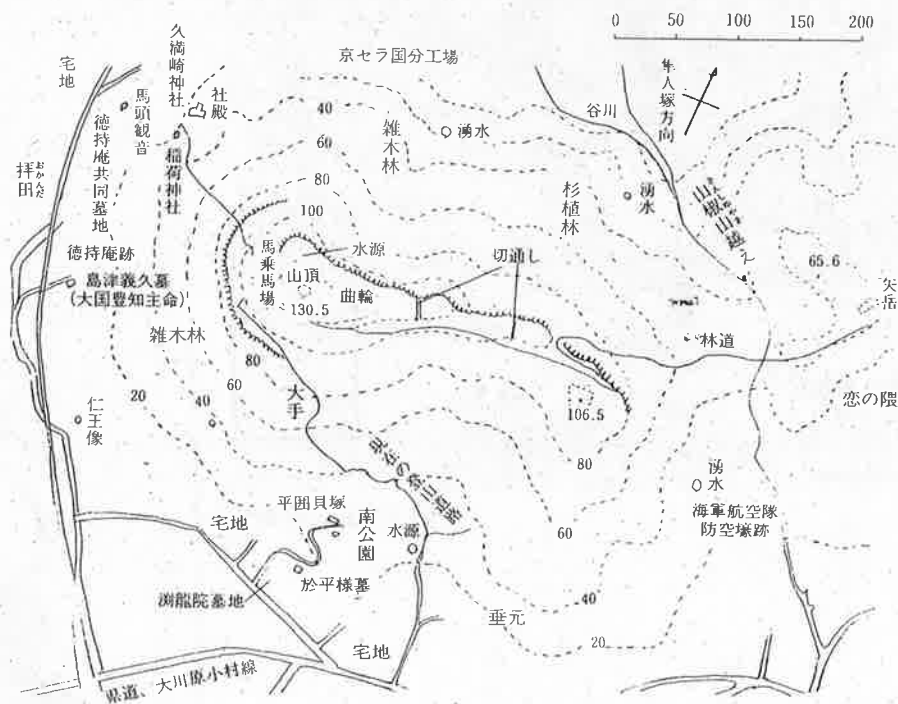
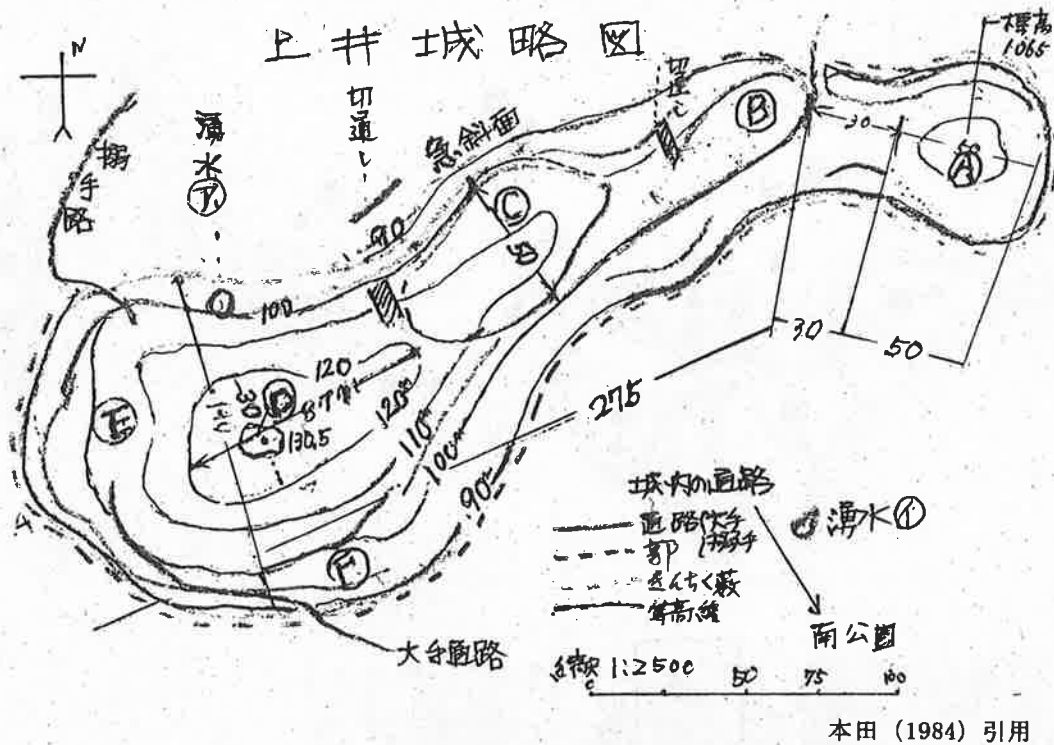
第1図 霧島市周辺地図



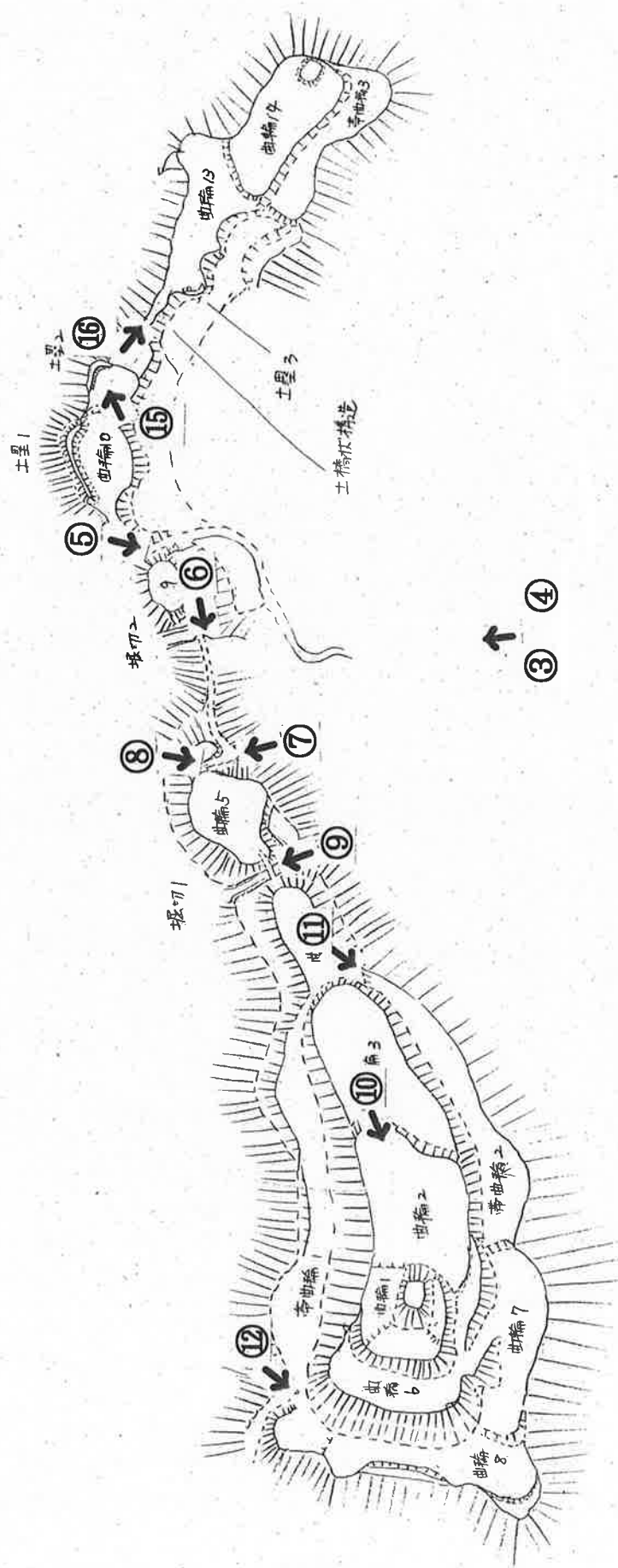
下鶴 (2002) 引用



第2図 清水城跡踏査記録図



第3図 上井城跡略図等



第4図 上井城跡縄張り図 (黒川作成)

